

信じて送り出した恋人アイドルがオナホ堕ちしていた件

由紀 「はいはい♪ プロデューサーさん♪ 久しぶり♪ どう？ 私の姿見えてる？」

華恋 「えへへ♪ プロデューサーさん、華恋です♪ 私達がプロデューサーさんの前からいなくなっ
て一か月くらい経っちゃいましたかね？ 心配させちゃってごめんなさい♪」

由紀 「あ〜……多分、一か月もアイドル活動サボって何やってたんだ〜とか、いろいろ疑問に思う〜とはあるかもだけども〜」

華恋 「このビデオレターを最後まで見ていただければ分かると思いますので、絶対最後まで見てくださいね？」

由紀 「まあ今時ビデオレターなんて古いし、報告だけならメッセの方が速くていいかなって思ったんだけど〜……」

華恋 「でもですね？ 華恋達の『ご主人様』が絶対にこの映像をプロデューサーさんに送り付けるって譲らなくて……」

華恋 「あ！ 『ご主人様』っていうのは最近華恋達に良くしてくれている音楽番組のディレクターさんでして……」

由紀

「んま〜〜……はつきり言っちゃうとき、私達、
今後はプロデューサーさんとじゃなくてご主人
様とアイドルやっていく事に決めたから♪」

華恋

「プロデューサーさんと違って〜、ご主人様はお
金も、地位も、更には自分の歌番組まで持って
てですね？」

華恋

「ご主人様ってば、来月放送予定の地上波番組
で、私と由紀ちゃんのアイドルユニット、『ア
リスターズ』のメジャーデビューも約束してく
ださったんです♪」

由紀

「プロデューサーとじゃ地下アイドルの下品なイ
ベントしか出られなかったのにね〜」

由紀

「何かこういうのを目の当たりにしちゃうと、今
までプロデューサーさんと頑張ってきたのが馬
鹿みたいに思えちゃって……あとはまあ……何
よりも……ね？」

華恋

「はい……え〜と……そのう……ちよつと言う
のは恥ずかしいんですけど〜……」

由紀

「今の私達はもう、ご主人様専属の性処理アイド
ルになっちゃったから♪」

華恋

「今の私達はもう、ご主人様専属の性処理アイド
ルになっちゃいましたから♪」

華恋 「きっかけはプロデューサーさんとの恋仲をネタに脅されてだったんですけど……」

華恋 「でもご主人様とのエッチはプロデューサーさんとは比べ物にならない程気持ちよくなって……♪」

由紀 「ほんっと！ 今まであんな粗チンで喘いでたのが馬鹿みたいでね♪」

由紀 「もうご主人様の物じゃないと生きられない体に調教されちゃったの♪」

華恋 「だから決めたんです。もうプロデューサーさんの事は忘れて、ご主人様と一緒になろうって……♪」

由紀 「ただいくらなんでもこのままお別れじゃ可哀そうだし、最低限お世話になったお返しはしないとって思ってたね？」

華恋 「最後のお別れに、私達のご主人様にどうやって犯され、調教されたのか」

由紀 「私達がどれだけご主人様を愛していて、ご奉仕しているのか」

華恋 「その様子をこのビデオレターにまとめて送りましたので、これを最後に私達とは縁を切ってくれると助かります♪」

由紀

「あとこれ以上プロデューサーさんから連絡が来るとご主人様が怒っちゃうから、今後は金輪際、電話もメッセも送ってこないでね？」

華恋

「それではプロデューサーさん♪ 華恋達のエッチなビデオで楽しんでくださいね♪」

由紀

「じゃあプロデューサーさん♪ 私達のエッチなビデオで楽しんでね♪」

由紀

「……………失礼します……………」

華恋

「あう〜……………し、失礼致します……………」

由紀

「……………あなたから貰ったメッセージ通り、ホテルに来てあげたけど……………約束は守ってくれるんでしょうね？」

由紀

「何……………って……………！ 私と華恋がプロデューサーさんと一緒に楽屋でエッチしてる時の写真！あなたが隠し撮りしたその証拠を消してもらうっていう約束！ 忘れたとは言わせないわよ！……………」

由紀

「はあ……………よりもよって出演した番組のディレクターに現場お抑えられるだなんて……………本当に油断してたわ……………」

華恋

「しょ、しょうがないよ……………あの時は久々の歌番組で由紀ちゃんも華恋も舞い上がっちゃったし……………」

華恋

「大好きなプロデューサーさんに抱きしめて貰えて……………キスもしてくれて……………あんな素敵なキスされたら……………我慢できっこないもん……………！」

由紀

「ん……そうだね……私もあの時のエッチに後悔なんてないけど……はあく……ほんっと……もう……!」

由紀

「いいですか？ もう一度確認します。今晚、一晩だけです。あなたと一晩だけ寝てあげますから、終わったら私達とプロデューサーさんの関係は秘密にしてください」

由紀

「勿論証拠も全てこの場で消してもらいます。分かりましたか？」

華恋

「うう……由紀ちゃん……本当にプロデューサーさん以外の人とエッチするの……？ 私、怖いよ……」

由紀

「華恋……大丈夫だよ……エッチ何てほとんど毎日してきたじゃない！」

由紀

「そう……たった一晩この人とするだけ……プロデューサーさんとする時とは違ってゴム有りだし、私と華恋のテクニクでこんな人すぐにイかせてパパッと終わりにしちゃおう？」

華恋

「う、うん！ そうだよね！ プロデューサーさんもおっぱいでシコシコしてあげればすぐにイってくれてたし、おまんこに入れたら数秒でぴゅぴゅってしてくれてたもんね！」

華恋

「あの人も同じ男の人なんだし……うん、少しの我慢……そうすればまたプロデューサーさんと幸せなアイドル生活に戻れるの……！」

由紀

「そう！ 私達は負けない……！！ 卑怯で卑劣な手で女の子を脅すような人になんて絶対負けないんだから！」

華恋

「うん！ 私も負けない！ だって、私の体も気持ちも、全部ぜんぶプロデューサーさんの物だもん！」

由紀

「覚悟しなさい！ あなたの雑魚チンポなんて、すぐイカせちゃうんだから！」

華恋

「覚悟してください！ あなたのおちんぽなんて、すぐイカせてあげちゃいます！」

華恋

「んぶう……！　じゆる！　じゆるるる！　んちゅ……ん……うぶ……！　い、嫌っ！　こんな乱暴なキス……！　んぶっ！　ん！　ん……！」

華恋

「じゆるるっ！　ちゅぶっ！　んあ……！　やめ……！　ん……！　れろぶちゅ……！　じゆるる……！　んちゅ！　れろ、れ……れろれる……じゆるるる！　んぶっ……れるれる……んちゅ……ちゅぶぶっ……！」

華恋

「んぶっ！　じゆる！　じゆるるるう……！　……ん……ぶはあ！　はあ、はあ……！　うっ！　おえええ……！」

華恋

「うぶっ……で、ディレクターさんの口臭いです……！　唇も、ベロも、唾液も……全部が臭くて気持ち悪くて……う……おえええ……！」

華恋

「はあ、はあ……ん……でも……何で……？　こんな臭くて汚いだけのキスで……何でこんなにおまんこウズウズしちゃうの……？」

華恋

「ん……やっ……ダメ！　近づかないで下さ……んむう……！　じゅぶぶっ！　んぶっ！　ん！　ちゅ！　れろちゅぶ！　ちゅ……じゆるじゆるじゆる……！」

由紀

「んお！ お♪、お♪、お♪、おお……♪ んお……！！ ちょっと……！！ 私とエッチしながら華恋にキスとかどうゆうつもり……！！？」

由紀

「はあ、はあ……んお♪ お、おお……♪
ち、違っ！？ 誰が嫉妬なんて……！！」

由紀

「私はただ華恋の身を案じてるだけ……って、んぐううううう！！ 嫌っ！ 嘘でしょ！？ キスしながらこんな激しく動ける訳……ん、おおお♪、お♪、お♪、お♪、おお……♪」

由紀

「んぐっ！ お♪、お♪、お♪、お♪、お……♪
♪、こ、こんなチンポで……またイグ！ お♪、おお……♪ チンポでイグ……！！ チンポでおまんこイグう……！！」

由紀

「あああああ……！！ 嫌あああ……！！ イギたぐないのにい……でもイグう……！！ イっちゃうう……！！ 大っ嫌いなデカチンポでイグウウウウウ……！！」

由紀

「んおおおお♪ イグイグイグイグイグイグイグうううう……！！ おまんこイっぐううううううう……！！」

由紀

「んほおおおお♪ ん、お……♪、お……♪
おまん「イギユウ……♪ イグっ……♪ ん
ほ……♪、お……♪、おお……♪、チンポ
しゅ「い……♪ 「のチンポしゅ」「しゅぎる…
……♪」

由紀

「んほっ……♪、お……♪、お……♪、お
っ……♪ チンポお……♪ ん、お……♪、お
……♪、おっ……♪ チンポ……♪ チン
ポ……♪ チンポ……♪ チンポお……♪♪」

華恋

「んぷっ……ん、ん……ぷはあ……！！
はあ、はあ……ん、げほっ！ げほげほっ…
……！ はあ、はあ……ゆ、由紀ちゃん？ 大丈
夫？」

由紀

「んふう……♪ ふっ……♪ ふっ……♪
か、華恋……気を付けて……このチンポ……本
当にヤバイ……」

由紀

「こんなのにならなれ続けたら……イキすぎて本当
にダメになっちゃう……プロデューサーとの思
い出が……プロデューサーとのラブラブエッチ
が……全部このチンポで上書きされちゃう……
おまんこの形変えられちゃう」

華恋

「や……由紀ちゃん？ 嘘だよな？ そんな事…
…嫌っ……華恋、大好きなプロデューサーさん
とのエッチ忘れたくないよお……」

華恋

「って、ひっ!? 嫌っ! 来ないでください……
……、来ないで……! おちんぽ来ないで……
……!」

華恋

「そ、そうです……! おまんこの代わりにお口とおっぱいでシてあげますから……! ど、どうですか!? 華恋のニ〇センチ越えのデカパイでシコシコしたくありませんか……!?!」

華恋

「うう……どうかお願いします……私のおまんこはプロデューサーさんだけの物なんです……! おまんこエッチ以外なら何でもしますから……だからどうかおまんこだけは……!」

華恋

「お願いします……お願いします……!」

華恋

「……え……? ひいつ……! い、嫌っ……!
だ、ダメです……! おパンツ脱がしちゃ嫌っ……! って、ひっ!?!」

華恋

「そんな大きいおちんぽ入りません……!
嫌っ! ダメ! 離してください……! んぐっ……! 嫌っ……! いやいやいやいやあああ……!」

華恋

「あぐっ……! いたい……! おまんこ裂けりゅ……! ん、お……! 裂けちゃ……んっ……! つきゅ……!」

華恋

「んあ♪、お♪、お♪、こんにゃの知らにゃ
いよお……♪、ん、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
「おお……♪」

由紀

「……ああ……華恋まで下品に喘がされて……う
……うう……華恋、頑張つて……負けない
で……あんなチンポに負けないで……」

華恋

「んほ、おおお~~~~♪、お♪、お♪、お
♪、お♪、お♪、お♪、お♪、おお~~~~
「♪」

華恋

「おちんぽ気持ちいいよお……♪、おお~~~~♪
おちんぽ~~~~♪、ん、お♪、お♪、お
♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お
♪、お~~~~♪」

由紀 「うゝわ♪ 華恋ってば可愛い顔してオホ声エグすぎない？ いくらご主人様のデカチンポが素敵すぎるからって下品すぎるでしょ♪」

華恋 「うゝ……それを言うなら由紀ちゃんだって……こんな豚さんみたいな声をあげて……人の事言えないよ？」

由紀 「あはは……♪ まゝね……でも仕方ないでしょ？ この時はまだプロデューサーさんの雑魚チンポの味しか知らなかったんだから」

華恋 「えへへ……そうだね……画面の中の華恋達はまだプロデューサーさんの事が大好きで、頑張っ
てイかないように耐えてたけど……」

由紀 「今思えばご主人様のデカチンをおまんこに入れられた時にはもう堕ちちゃってたよね♪」

華恋 「うん♪ こう、ね？ 子宮の奥をコン♪ って小突かれる度にメスの本能がキュン♪ ってしちゃってね？」

華恋 「ああ……♪ 華恋達を幸せにしてくれるのはプロデューサーさんの雑魚チンポ何かじゃなくて、ご主人様のこのおちんぽ様なんだって分かって
らされちゃったの♪」

由紀

「そそ♪ 私達はファンの皆が憧れるアイドルなのに、もうそんなのどうでもよくなっちゃって♪ 頭の中チンポの事でいっぱいになっちゃったよね♪」

華恋

「うん♪ チンポ♪ チンポ♪ チンポ♪ チンポ……って♪ お腹も頭もぜんぶおちんぽ様でいっぱいなの♪」

華恋

「はううう♪ アイドルの事をオナホとしか思っていないご主人様の乱暴な腰振り……ううう♪ 思い返したただけで……ん、お……♪、お……♪、お、お……♪」

由紀

「あはは♪ 華恋ってばご主人様にレイプされたの思い出してオホってる♪ は……♪ ほんっと生粋のドミオナホだね♪」

由紀

「とまあここまでがご主人様に初めて犯された時の映像になるんだけど……どう？ 画面の外にいるプロデューサーさん♪」

由紀

「あなたの雑魚チンポじゃ見られなかった元恋人のオホ声ドスケベセックス♪ 楽しんでくれる？ シコシコしてくれてる？」

華恋

「ん、えへへ♪ この後にも沢山エッチな姿を記録してますから♪」

由紀

「金玉が空っぽになるまでお猿さんみたいにシコシコしてくれていいからね♪」

華恋

「それじゃあ次のチャプターにいきましょうか♪」

由紀

「次のエッチはね〜……?」

華恋

「次のエッチはですね〜……?」

由紀

「ご主人様のザーメン臭いデカチンポを〜♪」

華恋

「アイドルのちっちゃなお口で啜え込まされてからの〜♪」

由紀

「お掃除イラマチオだよ♪」

華恋

「お掃除イラマチオです♪」

由紀

「はあ、はあ……ん、お……、お……、お……
♪ んふう……ふう……ん、お……♪ お
……、お……♪」

華恋

「ふう……ふう……ん、お……♪ お……
……、お……♪ お……♪ ん……あん……♪
お、お……♪」

由紀

「はあ、ん……こんの……！ あれだけおまんこ
犯してまだ勃起してるだなんて……こんなのお
かしいでしょ……！」

華恋

「う……あ……ん……はあ、はあ……
だ、ダメ……華恋、イキすぎて腰が抜けちゃっ
て……ん……全然動けないよ……」

華恋

「プロデューサーさんとのセックスと全然違う……
……セックスがこんなに気持ちいいなんて……ん
……あん……♪ お……、お……お潮……ん
……あん♪ お漏らし止まらないよお……♪」

由紀

「はあ、はあ……華恋、ダメだからね？ こんな
チンポに心を許しちゃ……もし負けちゃったら
もうプロデューサーさんには会えなくなっちゃ
うんだから……」

由紀

「って……ちよっと何？ 急にデカチンポ顔の前
に持ってきたりして……」

由紀

「って、うぐ……！ 何て臭い匂いなの……！
生ゴミみたいに臭くて……それに……何？ チ
ンポの先に白いツブツブみたいなのがついてて
……」

由紀

「ん……スン……スンスン……すう……う……
うぶっ……！？ おええええ……
……？」

華恋

「ゆ、由紀ちゃん？ だ、大丈夫！？」

由紀

「おえっ……！？ うっぶっ！ お、おえええ
……」

由紀

「んぷ……げほっ！ げほっ！ げほっ……！
うえ……だ、大丈夫……あまりの臭さに思わず
嘔吐いちゃっただけだから……」

由紀

「話に聞いたことはあるけど……もしかしてこれ
がチンカスって奴なの？ プロデューサーさん
はエッチする前に綺麗にしてくれてたから初め
て見るけど……」

由紀

「って……え……？ まさか今からこれを舐め
ろって言うの？」

華恋

「ええ！？ こんなに汚くて臭いチンカス……匂
いを嗅ぐだけでも吐きそうなのに、舐めたりし
たら病気になっちゃうよ！？」

由紀

「そうよ！　いくら脅されてるからって、こんな汚いチンカス、舐める訳ない……って、嫌っ……！　鼻先にチンポ擦り付けちゃ……んぶっ……！　お……♪、お……♪、お……♪、おお……♪」

由紀

「嫌……チンカスが鼻について……ぶ」……♪
ぶ」ぶ」お……♪　ん、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪」

由紀

「だ、ダメ……♪　この匂い……堕ちる……♪
ぶ」お……♪　豚に堕ちる……♪　んぶう……♪、お……♪、お……♪、お……♪　チンカスの匂いでメス豚アイドルに堕ちるう……♪」

由紀

「ん、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪　チンポ、お……♪　チンポ……♪　チンポ……♪　チンポ……♪」

由紀

「はあ、ああ……♪　わ、分かったから……♪　舐めるから早く鼻からどけて……って、ぶ」
「お……♪　ぶ」ぶ」……♪　ん、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪」

由紀

「はあ、はあ……♪　ん……あ……♪……
……んぶう……♪……？　んぐっ……？　ん、んぶぶ……♪……♪……♪……♪」

華恋

「はあ、はあ……うゝ……由紀ちゃん……何で……？ さつきからずっと口では嫌がってるのに……何でそんなにトロンってした顔してるの……？」

華恋

「無理矢理お口におちんぼ入れられて……喉の奥までチンカス擦り付けられて……絶対美味しくないはずなのに……臭くて汚いチンカスおちんぼなのに……」

華恋

「由紀ちゃんぽっかりそんな気持ちよさそうな顔でおちんぼしゃぶっちゃって……」

華恋

「ああ……由紀ちゃんだけチンカスおちんぼ様ペロペロ出来て羨ましいな……♪」

華恋

「って、ふえ！？ ち、違います！ 今のは違うんです！ 思わず声が漏れてしまっただけで……！ うゝ……あうあう……」

由紀

「んむう……じゅるる……じゅるじゅるじゅるじゅる……んぷっ……ん、んゝ……じゅるる……じゅるるうゝゝ……ん、ぷはあ！ はあ、はあ、はあ、はあ……」

由紀

「ん、げほっ……！ げほげほ……！ うぶっ……チンカスが喉にからんで……う……おええええええゝゝゝ……！」

由紀

「んぷっ！ げほげほ……！ はあ、はあ……」

華恋

「ああ……由紀ちゃん……」

由紀

「ん……うぶっ……華恋……ごめんね……無様な姿を見せちゃって……」

華恋

「ううん……全然そんな事ないよ……華恋を庇っておちんぽしゃぶってくれてたんだもんね……由紀ちゃん……本当にありがとう……♪」

由紀

「華恋……」

華恋

「大丈夫……続きは任せて？」

華恋

「ん……しよ……っと……」

華恋

「はあ、はあ……ああ……これがこの人のおちんぽ……う……由紀ちゃんの唾液とチンカスが混ぜあって……う……凄く臭い……ん……くっ……」

華恋

「ああ……♪ おちんぽ……♪ おちんぽ……♪
おちんぽ……♪ おちんぽ……♪ プロデューサーさんのちっちゃなおちんぽと違う……本物のおちんぽ……♪ 遅いおちんぽ様あ……♪」

由紀

「……か、華恋？ 何でおちんぽ様だなんて呼ぶの？ ダメだよ？ 私達はプロデューサーさんの恋人で、このチンポとは今日だけの関係で……」

華恋の

「はあ〜……♪ おちんぽ……♪ おちんぽ……
♪ おちんぽ……♪ おちんぽ……♪ おちん
ぽ……♪ おちんぽ……♪ おちんぽ……♪
おちんぽお……♪」

華恋

「ああ……♪ チンカスおちんぽお……♪ いた
だきま〜……♪ はむう……♪」

華恋

「ん、じゆる♪ じゆるるる♪ ん〜……じゆる
じゆるじゆるじゆる♪ じゆるじゆるじゆる
じゆる……♪ んぷっ♪ ん〜……れろれろれ
ろれろ♪ じゆる♪ じゆるるる〜……♪」

華恋

「んぷっ♪ ん、ん〜……♪ これがチンカしゆ
〜……♪ んちゆ♪ れ〜ろれろれろ……
んふふ♪ すっごく酸っぱくて生臭くて……♪
ん〜……とっても美味しいです〜……♪」

由紀

「え……？ そんな……華恋……！ 正気に戻っ
て……！ こんなチンカス塗れの汚いチンポが
美味しい訳ないでしょ！」

由紀

「ほら今も亀頭から我慢汁だらだら漏れてきて苦
いでしょ？ プロデューサーさんの清潔なチン
ポの方が美味しいでしょ？」

華恋

「んぶんぶんぶんぶ……♪ ん〜……♪ じゆる
じゆるじゆるじゆる……じゆるる……じゆるる
る〜……♪ ん〜……♪ ぷはあ♪ はあ、
はあ……♪」

華恋

「ん〜……ちゅ♪ あう〜……♪ 確かに……ん
〜……ちゅ♪ プロデューサーさんのおちんぽ
は綺麗だったけど……ん……ちゅ♪」

華恋

「でも……こっちのおちんぽの方が味がして……
ん……じゆるじゆる……んちゅ♪ チンカスも
食べ応えがあって……あむ……じゆるじゆる
じゆるじゆる……♪」

華恋

「んぷっ……う〜……ダメ……♪ これ……私負
けちやう……♪ チンカスが美味しすぎて……
んちゅ……じゆるじゆるじゆるじゆる……♪
ん……ちゅ♪ ああ……チンカスのお替り欲し
がっちやうよ〜……♪」

華恋

「はあ、はあ……♪ チンカスう……♪ チンカ
ス……♪ チンカス……♪ チンカス……♪
チンカス〜……♪ 美味しいチンカスおちんぽ
様あ……♪」

華恋

「ん、ん」くっ……どうか……もっど……♪ もっ
と食べさせてください……♪ 美味しいチンカ
スをお口いっぱいください……♪ ん……あ
〜……んむう……♪」

華恋

「ん〜……♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶん
ぶ♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪」

由紀 「う……ま、まあ……確かに……二人でなら何とかなるかもだけど……」

華恋 「それに……ん……由紀ちゃんも本当はこの人のチンカス……もつと舐めて、しゃぶって、「くっくんしたいんだよね？」

由紀 「ふえええ！？ ちょ、ちよつと華恋！ 何言つて……！」

華恋 「ん……大丈夫だから……ね？ 由紀ちゃん……一緒にシよ……？」

由紀 「う、うう……華恋がそこまで言うなら……」

華恋 「それじゃあ、由紀ちゃん……♪」

由紀 「ん……華恋……一緒に……」

華恋 「せ〜〜の……♪ あ〜〜〜
……んむう……！ じゆるじゆるじゆる
♪ じゆるじゆるじゆる♪」

由紀 「せ〜〜の……♪ あ〜〜〜
……んむう……！ じゆるじゆるじゆる
♪ じゆるじゆるじゆる♪」

由紀

「んゝ……じゅるるる……んぷっ……！ 何これ……んちゅ……じゅるじゅるじゅるじゅる……んぷっ……チンポを挟んで華恋ともキスしちゃって……んちゅ……じゅるるる……」

由紀

「んちゅ……れゝろれろれろ……んぷっ……華恋の事は大好きだけど……んぷっ……チンカス交じりのレズキスとか……んぷっ……んゝ……ほんつと最低……じゅるじゅるじゅるじゅる……」

華恋

「んぷっ……れろれろれろ……んちゅ……じゅるじゅる……んゝ……チンカしゅがまだこんなに沢山……んゝ……裏筋にも……カリの段差にも……ん……ちゅ♪ じゅる♪ じゅるるる……♪」

華恋

「んぶんぶんぶん♪ んゝ……じゅるるる♪ ん、れろれろ……ちゅ♪ じゅるる……ん……♪ 由紀ちゃんとも……んゝ……れゝろれろれる……チンカス分け合いながらレズキシユウ……んちゅ♪ じゅるじゅる♪」

華恋

「んゝ……じゅるじゅる……ん……由紀ちゃん……♪ ふあい♪ チンカスのおすそ分け……じゅるじゅるじゅるじゅる♪ じゅるじゅるじゅるじゅる……♪」

由紀

「んぎっ！ 待つで……！ ぐるじい……！ ん
ぶう……！ じゆるるるっ！ ん〜！！ ん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶう〜…
……！」

由紀」

「んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ！ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶ！ んぶんぶんぶ
んぶんぶんぶんぶ！ んぶんぶんぶん
ぶんぶんぶんぶ！」

華恋」

「んあ……私もお……♪ ん〜……あぶう……！
んぶう〜♪ んぶんぶんぶんぶんぶん
ぶんぶ♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ
♪」

由紀

「んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ！ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶ！ んぶんぶんぶ
んぶんぶんぶんぶ！ んぶんぶんぶん
ぶんぶんぶんぶ！」

華恋

「んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪ んぶんぶんぶ
んぶんぶんぶんぶんぶ♪ んぶんぶんぶん
ぶんぶんぶんぶ♪」

由紀

「んぐう……！ んぶぶう〜… お！……ん
ぶう……！ もう無理い……！ んぶう……！
んぶんぶんぶう……！ 喉「われりゆ…
……！ ん、んぶう〜…！」

華恋

「んちゅ……じゅるじゅるじゅる……ん
……おちんぽお……♪ おちんぽおちんぽおち
んぽおちんぽ……♪ ちゅぶぶ♪ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶう……♪」

由紀

「んぐう……はやぐいで……！ イつでえ…
……んむう……じゅるる……じゅるるる
……！」

華恋

「ぶあい……♪ イつへくらひやい……♪ ん
ちゅ……じゅるじゅるじゅる……じゅる
る……じゅるるる……！」

由紀

「ん……！ んぶんぶんぶんぶんぶんぶん
ぶ！ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ！
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ！ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶ……！」

華恋

「ん……♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ
♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪ ん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪ んぶんぶ
んぶんぶんぶんぶんぶ……♪」

由紀

「ん……！ んむつ！ じゅるる…… じゅる
る……！ じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅ
……！」

華恋

「ん……♪ んむつ♪ じゅるる♪ じゅる
る……♪ じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅ
……♪」

由紀

「うう……華恋ってば、もうチンポに頭やられ
ちゃってるし……う……ん……あ……
♪ ダメ……私も……ん……♪ 口からチンカ
ス臭がして……」

由紀

「う……や……チンカスザーメン零れちゃう……
ん……ん……くちゆくちゆくちゆくちゆ……
んむ……「く……く……く……く……ん
……ぷは……！ はあ、はあ……」

由紀

「んむ……スン……スン……すう……
……はあ……あ……♪ っ……♪ っ……♪ っ……
……これが強いオスの香りなんだ……」

由紀

「ん……はあ、はあ……♪ チンポの香りい……
♪ ん……つよつよチンポの香りい……♪
ん……「く……♪ お……♪ おお……」

由紀

「こんなの嗅いでたらおまんこ開いちやう……♪
私、アイドルなのに……清純なおまんこなの
に……こんなの……んお……♪ お……♪
おお……」

華恋

「ん……あ……私もお……♪ んお……♪
お……♪ お……♪ おお……♪ チンカス
の香りでイグ……♪ おまんこオホ声あげて
イっちやうよお……♪」

由紀+

「んおおおおおお〜〜〜♪ おお〜〜〜…
…♪ んお…♪ お…♪ お…♪ お…
…♪ おお〜〜〜…♪♪」

華恋+

「んおおおおおお〜〜〜♪ おお〜〜〜…
…♪ んお…♪ お…♪ お…♪ お…
…♪ おお〜〜〜…♪♪」

由紀

「ん、ふう〜…ふう〜…も、もう…だ、ダ
メ…本当に負けりゆう〜…チンカス
チンポに負けちゃう〜…んお…♪
お…♪ お…♪ おお〜〜〜…
♪」

華恋

「はあ、はあ…♪ ん…あう…♪ おちん
ぽ〜…♪ このおちんぽ様素敵すぎま
しゆう…♪ おちんぽ様…♪ おちんぽ
様〜〜〜…♪」

由紀

「う〜…こんな体験したら…もう…思い出
せない…プロデューサーさんのラブラブエ
ッチ…あの頃の幸せエッチ…全部下品なド
スケベエッチに上書きされちゃう〜…」

華恋

「ああ…でも…このおちんぽ様になら…華
恋、もう堕ちちゃってもいいかも…♪」

由紀

「だ、ダメだよ…そんなの…快樂に負け
ちゃ…本当にダメになっちゃうんだから…
…」

由紀

「だけどこのままじゃ……私……もう……
ああ……プロデューサーさん……お願い……
……助けて……じゃないともう……私達……
おちんぽ様に堕ちちゃうよお……」

由紀 「つて、ちよっと！ 華恋つてば、改めて見返してみたらこの時点でもうご主人様のおちんぽにメロメロじゃない！」

華恋 「えへへへ〜♪ だつて〜♪ あんなに激しくお口犯されてチンカスの味を教え込まれちゃったんだよ？」

華恋 「華恋の口から喉チンコを通して喉奥まで犯されて、チンカスザーメン無理矢理飲まされて……マーキングされちゃって……♪ あう〜……♪ あんな事されたら女は誰でもメス堕ちしちゃうに決まってるよ〜♪」

華恋 「はう〜……♪ ご主人様のおちんぽ様はとっても大きくて、硬くって素敵だったな〜……♪」

華恋 「それに比べてプロデューサーさんのおちんぽは……ぷぷ♪ 華恋が思いっきり啜え込んで喉にも届かない、短小包莖チンポなんだもん♪」

華恋 「あんな雑魚チンポが華恋の恋人だったなんて、ちよっと信じられないよ〜♪」

由紀 「ほんっとそう！ プロデューサーさんのチンポとか〜、包莖だし〜♪ 短小だし〜♪ 早漏だし〜♪ 金玉も小さいし〜♪ いいとこまるで無し〜♪」

由紀

「んもうオスとして情けなさ過ぎっていうか……
…あはは♪ 流石に同情しちゃうね♪ ほ
んつと可哀そうなプロデューサーさん♪」

由紀

「まあプロデューサーさんとはこれで最後の訳だ
し……今回は特別に……♪」

華恋

「元恋人アイドルとして……こゝちくら♪」

由紀

「プロデューサーさんの……おゝみゝみ♪ バイ
ノーラルマイク越しに舐めてあげるね♪」

華恋

「プロデューサーさんの……おゝみゝみ♪ バイ
ノーラルマイク越しに舐めてあげますね♪」

由紀

「ん……れ……ろれろれろれろれろれろ
……♪」

華恋

「ん……れ……ろれろれろれろれろれろ
……♪」

由紀

「んちゅ♪ れろれろれろ……ん……ちゅ
♪ ふふ♪ プロデューサーさんどう？ ちや
んとイヤホンで私達の耳舐め♪ 聴いてくれ
てる？」

華恋

「んぷ……ん……れ……ろれろれろれろ……
んちゅ……ちゅ……ちゅ……ちゅ♪ えへへ♪
本当なら直接舐めてあげても良いかな……って
思ったんですけど……」

華恋

「ちゅ♪ ん〜……ちゅ♪ ご主人様がそれはダメだって許してくれなくって……♪ ん〜……ちゅ♪ れ〜ろれろれろ……じゅるるる……ん〜……ちゅ♪」

華恋

「ですから……ん……ちゅ♪ れろれろ……マイク越しに……ん〜……れろれろれろ……唾液を沢山塗しながらしゃぶってあげますから……ちゅ♪ ん〜……じゅるじゅるじゅるじゅる〜♪」

由紀

「んま♪ 私と華恋の耳舐め永久保存版だと思つて夜のオカズにしてくれていいからね♪ ん〜……ちゅ♪ れ〜ろれ〜ろれ〜ろれ〜ろ〜……♪」

由紀

「んぷっ……はあ……ん〜……それにしても……マイク越しに舐めるのってちょっと味気ないな〜……れ〜ろれろれろ……」

華恋

「ん……ちゅ……うん、ご主人様のお耳はいつも耳カスでいっぱい、とっても香ばしくて……臭くって……♪ 舐めてるだけでおまんこイっちゃうもん……♪」

由紀

「ね〜……普段はこう耳の奥まで〜……れ〜ろれろれろれろれろれろれろれろれろ〜……んちゅ……じゅるる……じゅるるるるるるるるるる〜……ん〜……ちゅ♪ って感じ？」

由紀

「お耳の奥に隠れた垢もぜ〜んぶ舐め取って〜…
…最後にはごっくんしてあげるとご主人様喜んでくれるんだよね〜♪」

華恋

「はい♪ お耳ご奉仕している時のご主人様は
とっても可愛らしい顔をされて……」

華恋

「んお……♪ お……♪ お……♪ おお〜…
…♪ ダメですう……♪ 思い出しただけで下
品な声が……んお……♪ お……♪ お……♪
おお……♪ はあ、はあ……ん〜……ちゅ♪
れろれろ……♪」

由紀

「ん……私も……マイク相手に耳舐め演技してる
だけなのにい……んお……♪ お……♪ おお
〜……♪ ご主人様のデカチン思い出しちゃっ
て勝手にオホっちゃう……んお……♪ お……
♪ お……♪ お〜……♪」

由紀

「プロデューサーさんの雑魚チンポとは違う、女
をメスにしてくれるチンポ様あ……♪ んお…
…♪ お……♪ おお……♪ ん〜……れ〜…
ろれろれろ……じゆる……じゆるる〜……♪」

由紀

「はあ〜……また舐めたい……チンポ様じゆる
じゆるしてあげたい……オナホアイドルの唾液
とベロでこんなふうにく〜……ん〜……れ〜…
ろれろれろれろれろれろれろ〜……
♪」

華恋

「はあ、はあ……プロデューサーがサツサとイケるように華恋も激しくれろれろしますね？ ん……れ……ろれろれろれろれろれろれろれろれろ……♪」

由紀

「ん……♪ じゆるるる……♪ んぷっ♪ ふふ♪ プロデューサーさ……♪ ほ……♪ 想像してみて……？」

由紀

「元恋人のアイドルが……♪ プロデューサーさんの腕に規格外のドスケベおっぱい押し付けながら……唾液塗れのいやらし……いベロで……円を描くように……ん……れ……ろれろれろれろ……♪」

由紀

「んちゅ♪ じゆるるる♪ ん、激しく耳カスれろれろしてるんだよ……♪ ん……ちゅ♪ じゆる♪ じゆるじゆるじゆる……♪」

華恋

「んぷっ……れろれろれろ……プロデューサーさ……♪ ほ……♪ プロデューサーさんが大好きだった華恋のデカパイを露出して………耳舐めしながら乳首オナニーしちゃいますよ……♪」

華恋

「はあ、はあ……♪ ん……あん♪ やあ……♪ 乳首気持ちいい……♪ ん……お♪ お♪ お♪ おお……♪ 乳首オナニー気持ちいいです……♪」

華恋

「んお♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ 私の乳首い……♪ ご主人様にいっぱい弄ってもらったので……もうプロデューサーさんが知っているような上品な乳首じゃないんです……♪」

華恋

「乳輪は大きく膨らんで、乳首は一日中勃起しっぱなし……♪ ん……れろれろれろれろ……♪ ちゅ♪」

華恋

「ああ……♪ 今も勃起乳首がジンジン痺れて……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ 乳首気持ちいいよ……♪ ん……れ……ろ……れ……ろ……れ……ろ……♪」

由紀

「ん……れろれろ……♪ ちゅ♪ そういえば……♪ 今度ご主人様がオナホアイドルの証になって、乳首に穴開けてピアスを付けてくれるって言うてくれてたな……♪」

由紀

「それも……♪ 大きなダイヤが付いた高いピアス♪ 一生ご主人様のものっていう証らしいんだけど……♪ こんなのもうご主人様と私達の婚約指輪みたいな物だよ……♪ ん……れろれろれろ……♪」

華恋

「じゆるじゆる……ん……ちゅ♪ えへへ♪
下品に育ったアイドルの勃起乳首に婚約指輪だ
なんて……んもう♪ どこかのプロデュー
サーさんと違ってお金も甲斐性もあって素敵す
ぎますう……♪」

華恋

「これからは穴あき勃起乳首に婚約指輪を付け
て、一生懸命アイドルするんです♪」

華恋

「きつとライブ中も乳首ピアスが衣装の下から浮
いちやつて、ファンの皆さんにバレちゃうで
しょうけど……♪」

華恋

「正直ですね？ ライブや握手会の時もおっぱい
をずう……と視姦してくるようなキモブタの皆
さんの事なんてどうでもいいです♪」

華恋

「今の華恋達にとって、あんな豚さん達よりもご
主人様の命令の方が断然重要ですから……♪」

華恋

「ご主人様が命令してくれば何だっています……
……それが例え、大勢のファンの前でオナニーし
ろっていう命令でも……♪ 情けない元恋人に
オナネタを提供してあげろっていう命令でも……
……♪」

由紀

「ん……じゆるる♪ れ……ろれろれろれ……
ん……ちゅ♪ ふふ♪ プロデューサーさん
♪ 分かってくれた？」

由紀 「今の私達は身も心もご主人様に心酔してるの♪
愛してるの♪」

由紀 「例えご主人様の奴隷でも……れろれろれろ……
ん……ちゅ♪ 都合のいいオナホアイドルで
も……れ……ろれろれろ……ちゅ♪ ん……
ちゅ♪ はぶっ♪ れろれろれろ……♪」

華恋 「ちゅ♪ れろれろ……ご主人様の傍にいられれ
ばどんな関係でもいいんです……♪」

華恋 「それが華恋達の幸せですから……ん……ちゅ
♪ もうプロデューサーさんの雑魚チンポなん
てお役御免なんです♪」

由紀 「ん……れ……ろれろれろれろれろれろれ
ろ……んちゅ……じゅる……じゅるるる……
じゅるるるるるるるるるる……ん
……ぷはあ♪ はあ、はあ……♪」

華恋 「ん……れ……ろれろれろれろれろれろれ
ろ……んちゅ……じゅる……じゅるるる……
じゅるるるるるるるるるる……ん
……ぷはあ♪ はあ、はあ……♪」

由紀 「だからさ……雑魚チンポは雑魚チンポらし
く、無様にイっちゃって？」

華恋 「ですので……雑魚チンポは雑魚チンポらし
く、無様にイってください♪」

由紀²

「ほらら♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪
〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪
〜♪」

華恋²

「ほらら♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪
〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪ ゼ〜♪
〜♪」

由紀²

「それ♪ 雑魚チンポイケ♪ 雑魚チンポイツ
ちやえ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪
イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ〜♪」

華恋²

「それ♪ 雑魚チンポイケ♪ 雑魚チンポイツ
ちやえ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ♪
イケ♪ イケ♪ イケ♪ イケ〜♪」

由紀^A

「雑魚チンポイツちやえ〜〜〜〜〜♪」

華恋^A

「雑魚チンポイツちやえ〜〜〜〜〜♪」

由紀

「ふ〜〜〜……っと……プロデューサーさん、ど
うだった？ 元恋人アイドルに馬鹿にされなが
らの寝取られぴゅっぴゅ、気持ちよかった？」

華恋

「もし華恋達を思い出して勃起しちゃったら、い
つでもこの音声を聞いて情けないおちんぽ
ぴゅっぴゅしてくれていいですからね♪」

由紀

「って……ちょっと調子にのって尺とりすぎ
ちゃったね〜……え〜っと、ご主人様にお口を
犯されたところまで再生したから次は〜……」

華恋

「あ〜 次のチャプターはいよいよ私と由紀ちゃん
んがご主人様のおちんぼ様に忠誠を誓ってオナ
ホアイドルに堕ちる……じゃなくって、オナホ
アイドルに成り上がるところだね♪」

由紀

「お♪ いよいよメインどころだね〜♪ 今思い
返すだけで……ん、お……♪ お……♪ お
……♪ お……♪ お……♪ お……♪」

華恋

「えへへ♪ それじゃあプロデューサーさん♪
この後も楽しんでくださいね♪ ん〜……ちゆ
♪」

由紀 「はあ、はあ……♪ ん、お……♪、お……♪
 お、お……♪ このチンポ凄いく……♪ んお
 ……♪ お……♪ お……♪ お……♪
 ……♪」

由紀 「こんな事続けてたら堕ちちやう……私達にはプ
 ロデビューサーさんがいるのに……ω人でアイド
 ル活動頑張ってきたのに……んお……お……
 ♪ オナホアイドルになっちやうなんて……そ
 んなのダメなのに……」

華恋 「んへ……えへへ……おちんぽお……♪ おち
 んぽ好き……♪ この大きなおちんぽ様が大
 好きなお……♪ ん、お……♪、お……♪
 お……♪ おちんぽ……♪ おちんぽお
 ……♪」

華恋 「ああ……♪ おちんぽお……♪ おちんぽお…
 ……♪ おちんぽお……♪ ん……ああ……♪
 おちんぽ欲しい……♪ おちんぽ欲しいよお…
 ……♪ おちんぽ♪ おちんぽ♪ おちんぽ♪
 おちんぽ……♪」

由紀 「やだ……華恋……お願い……負けないで……華
 恋がオナホアイドルに堕ちたら私も………堕
 ちちやう……チンポ奴隷に堕ちちやうよ…
 ……」

華恋の

「あう〜……♪ チンポ♪ チンポ♪ チンポ♪
チンポ♪ チンポ♪ チンポ♪ チンポ♪
チンポ〜……♪」

由紀の

「やあ……♪ チンポ……チンポ……チンポ……
チンポ……♪ チンポ……チンポ……チンポ……
…チンポ〜……♪」

由紀の

「って、わあ〜……♪♪」

華恋の

「って、きやあ……!?!?」

由紀

「ちよつと……急にチンポを動かさないでよ……
……うう〜……何度見ても立派なチンポ……ん
……♪くっ……♪」

由紀

「……チンカスの残り香もかおってきて……何で
こんなに臭いの美味そうに感じるのよ〜……
……!」

華恋

「わあ……♪ 凄いですう……ん〜……絶倫チン
ポ様あ……♪ ん、お……♪ お……♪ お
……♪ お……♪ お〜……♪ こんな香ば
しくて臭いチンポ様初めてえ……♪」

華恋

「きつとまたおまんこを乱暴に突き上げられて、
犯されて、メス堕ちされちゃうんですね〜……
♪」

由紀 「うぐっ……どうせ今夜は私達を逃がす気がない
んでしょ？ なら早くしなさいよ……」

由紀 「華恋と違って私は負けないんだから……そうよ
……無理矢理犯されたって……私の気持ちはま
だ……まだプロデューサーさんの物なんだから
……」

由紀 「……へ？ オネダリ……？ オナホアイドル宣
言……？ んな……！ ば、バカにしないで！
そんなバカみたいなさる訳……！」

華恋 「はい！ はいはーい！ しますう……！ おち
んぽオネダリでもオナホアイドル宣言でも何で
もしますう！ ですからおちんぽください！
デカチンポでおまんこズポズポしてください……
……！」

由紀 「ええ……！？ そんな……！ 華恋だけセツク
スする何てズルい！ ……じゃなくって！ 華
恋！ プロデューサーさんとの関係はどうする
の！ アイドル活動だってまだまだこれからな
のに……！」

華恋 「もうそんな事どうでもいいの♪ だって、プロ
デューサーさんといたってお金は集まらない
し、メジャーデビューも上手くいかないし、エ
ッチも全然気持ちよくなれないんだよ？」

華恋

「それに比べてこの人はお金も地位もあって、こんな大きなおちんぼ……ううん♪ おちんぼ様も持って……華恋の事を一匹のメスにしてくれる……そんな素敵なお人なんだよ？」

華恋

「こんな経験しちやったら……華恋、もうプロデューサーさんなんかじゃ満足できないし……それは由紀ちゃんも同じだよね……？」

由紀

「う……そんな事……」

華恋

「由紀ちゃん……嘘はダメだよ？ 本当は欲しいんだよね？ プロデューサーさんの雑魚チンポなんかじゃなくって……この人の……ご主人様の素敵なおちんぼ様で、おまんこいっぱいズポズポして欲しいんだよね？」

由紀

「……う……うう……ダメ……それ以上誘われたら私……私い……」

華恋

「大丈夫……♪ 私も一緒だから……ね？ 由紀ちゃん……一緒にプロデューサーさんの雑魚チンポなんて捨てて……この人のオナホになる？ 都合のいいオナホアイドルになる？」

由紀

「あ、あり……う……うん……なるう……♪
華恋と一緒に……オナホにい……この人の……ご主人様のオナホアイドルになるう……♪」

華恋 「えへへ♪ じゃあ由紀ちゃん♪ 一緒に主人様のオナホールになる為に〜♪」

由紀 「はあ、はあ……♪ ん……♪ チンポのオネダリと……アイドルのオナホ宣言……だよね……♪」

華恋 「はあ、はあ……♪ ああ……♪ ご主人様あ……♪ ん〜……ちゅ♪ 華恋は〜……今この時から人間をやめて〜……ご主人様だけのアイドルにい……♪ 都合のいいオナホアイドルになりますから〜♪」

由紀 「私も……♪ ご主人様……♪ ん〜……ちゅ……もうおまんこが熱くって……ご主人様のデカチン思い出すだけで子宮の奥がキュンキュンしちゃって……」

由紀 「こんなの……プロデューサーさんの雑魚チンポじゃ絶対届かなくて……お願い……ご主人様のチンポでここ……おまんこコンコンして……?」

由紀 「私の事好きに犯してくれていいから……ううん……好きに犯して欲しいの……♪ だって……私はあなたの……ご主人様だけのオナホールに……オナホアイドルにだから……♪」

由紀

「ね……？ あの人……プロデューサーさんの雑魚チンポの事なんか忘れちゃうくらい激しく犯して……？ あの人との味気ないセックスを忘れさせて……？」

華恋

「はあ、はあ……♪ ああ……♪ ご主人様あ……♪ はい……♪ ご主人様と素敵なおちんぼ様に忠誠を誓います……♪」

華恋

「下品に育ったアイドルのデカパイもお……♪ ぷっくり膨れたメス堕ち勃起乳首もお……♪ アイドルの清純おまんこもお……♪ 全部ぜんぶご主人様に捧げますう……♪ メス堕ちアイドルになりますう……♪」

華恋

「ですからどうか、ご主人様のこのデカチンで……だらしなくマン汁を漏らし続けるメスのおまんこに栓をしてください……♪」

華恋

「ほくら♪ ん……今もこのように……ん……あん♪ おまんこのビラビラが花開いて……♪ おしっこの穴とおまんこの穴が……♪ ご主人様のおちんぼ欲しいですう♪ ってオネダリしてるんですう……♪」

華恋

「はあ、んお……♪ お……♪ おう……♪ ダメ……♪ おまんこ勝手にイク……♪ イっちゃいますう……♪ んお……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪」

由紀 「やあ……ご主人様……華恋だけじゃなくて私の事も見てよ……あの人の雑魚チンポしか知らなかったおまんこにメスの味を教え込んだのはご主人様なんだから……♪」

由紀 「ん……お……おおう……♪ だから……♪きちんと最後まで面倒見てよね？ じゃないと恨むんだから……はあ、はあ……ん♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪」

由紀 「へ……？ 犯してほしかったら忠誠の証を……？」

華恋 「それってつまり……お耳にキスって事ですか……？」

由紀 「う……何それ……忠誠を示すなら普通唇にキスでしょ……？ なのに耳にキスって、ちよつとマニアックすぎない……？」

華恋 「でもでも……ご主人様が望むのでしたら、オナホアイドルの華恋達に拒否権なんてありませんから……♪」

由紀 「ん……じゃあ……」

由紀 「いっぱい耳舐めご奉仕……してあげる……♪」

華恋 「いっぱい耳舐めご奉仕……してあげますね♪」

「ん……はあ、はあ……♪ ああ……♪ ご主人様のお耳……♪ すっごく蒸れてて美味しそうです……♪ んあ……♪ はあ、はあ……♪」

「ん……ご主人様……♪ 私達の忠誠の証を、どうかお耳でお受け取りください……♪」

「耳舐めなんてプロデューサーさんにもした事ないけど……やらないやデカチンポくれないんでしょ……？ それなら私だって……♪」

「ご主人様……♪」

「ご主人様……♪」

「ん……れ……ろれろれろれろ……♪
ちゅ♪ じゅるじゅるじゅる……♪」

「ん……れ……ろれろれろれろ……♪
ちゅ♪ じゅるじゅるじゅる……♪」

「んちゅ……ちゅ、ちゅ♪ ああ……♪ 凄いです……♪ これ……ん……ちゅ♪ じゅるじゅるじゅる……ん……耳垢が沢山出てきて……♪ ちゅ♪ ん……れ……ろれろれろ……♪」

「んちゅ……じゅるじゅる……んぶ……う……何これ……耳の中くっさ……」

由紀

「これ全部耳垢なの……？ うう……一体どれだ
け耳掃除サボってたのよ……ん……スン……ス
ンスン……すう……はあ……
……」

由紀

「あ……くっさ……耳の中くっさ……
……でも……ん……ちゅ……れ
ろ、れ……ろれろれろ……」

華恋

「ん……ちゅ♪ えへへ♪ 確かにとっても臭
くて汚いお耳ですけど……♪ ちゅ♪ れ
ろれろれろ……♪」

華恋

「こうやってお口の中で耳垢を……いいえ♪
ご主人様のくっさい耳カスを♪ ん……
くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ くちゅくちゅく
ちゅくちゅ♪」

華恋

「ん……んむ……く♪ く♪ く♪
く……♪ ん、ん……ぷはあ♪ はあ、はあ
……♪」

華恋

「んへへ♪ ご主人様の耳カスジュース、最高の
喉越しでした……♪」

華恋

「華恋、もっともうっとう主人様の臭い耳カス
ごっくんしたいです♪ ですから……続き♪
失礼しますね♪ ん……れ……ろれ……
ろれ……ろれ……♪」

由紀

「ちゅ……れろれろ……ん……ぷはあ……
はあ、はあ……うっぷっ……私の口の中にも沢
山耳カスが……うっぷっ……！」

由紀

「う……分かってるわよ……私はご主人様のオ
ナホアイドルになるんだから……ん……ん……
……」

由紀

「くちゅ……くちゅくちゅくちゅくちゅ……く
ちゅくちゅくちゅくちゅ……♪ んむ……！
ごく……♪ ごく……♪ ごく……♪ ごく……
……♪ ん、んむ……ぷはあ……！ はあ、
はあ……！」

由紀

「うっぷっ……うええ……耳カスが喉に
絡まって……けほっ……！ けほけほっ……！
ん……はあ、はあ……」

由紀

「ご主人様の耳カス……こんなに臭くて汚いの
……何でもっと欲しくなっちゃう……♪
はあ、はあ……♪ う……♪ もっと耳の奥
まで……耳カスいっぱい食べたい……♪」

由紀

「ん、お……♪、お♪、お……♪、ご主人様
……♪ 耳カスのおかわりいただきます……♪
ん……れ……ろれろれろれろれろ……
……♪」

華恋

「んぷ……じゆるじゆる……んふふ♪ ご主人様あ……♪ 華恋の耳舐めご奉仕はいかがれすか……れろれろれろ……ん……ちゅ♪ オナホアイドルとして合格ですか？」

由紀

「んちゅ……じゆるじゆるじゆる……んぷっ……そうよ……恋人だったプロデューサーさんの事を捨てて、耳カスごっくんまでしたのにオナホにしてくれないとか許さないし……んちゅ……じゆるじゆる……♪」

華恋

「そうですよ♪ ご主人様のデカチンで犯してもらう喜びを教えてもらったのに……♪ 今更プロデューサーさんみたいな雑魚チンポの元に帰るだなんて、そんな拷問みたいな事耐えられませんもん♪」

由紀

「んちゅ……れろれろ……ん……ちゅ……だからお願い……ちゅ♪ れろれろれろ……ん……さっさと私達の事オナホにしてよ……」

由紀

「耳舐めでもケツ舐めでも何でもしてあげるから……ちゅ♪ ん……ちゅ♪ 都合のいい性処理オナホアイドルになってあげるから……れろれろれろれろ……♪」

由紀の

「れろれろれろれろ……ん……じゆる……じゆるるるる……ん……ちゅ♪ ちゅ……ちゅ♪」

由紀

「れろろれろれろれろれろ……んぷっ……最後
にい……残った耳カスを全部舐め取って……
れろろれろれろれろれろ……♪」

華恋

「れろれろれろれろ……んぷっ……しばらくはお
耳掃除しなくていいように……華恋も……
♪ んろ……れろろれろれろれろ……
♪」

由紀

「れろれろれろれろ……んろ……じゆる……じゆ
るるろろ……んろ……ぷはあ……♪
はあ、はあ、はあ、はあ……」

華恋

「れろれろれろれろ……んろ……じゆる……じゆ
るるろろ……んろ……ぷはあ……♪
はあ、はあ、はあ、はあ……♪」

華恋

「んろ……ご主人ひやまろ……♪ 舐め取った耳
カスを……♪」

由紀

「私達の唾液とくちゆくちゆ混ぜ込んで……」

由紀

「んろ……あむ……くちゆくちゆくちゆくちゆ
くちゆくちゆくちゆくちゆ♪ くちゆくちゆく
ちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆ♪ んろ
……♪く……♪く……♪く……♪く……♪く……♪
く……♪ んろ……ぷはあ♪ はあ、はあ……♪
はあろろ……♪」

華恋

「えへへ♪ では改めて……ん……ちゅ♪ ご主人様……♪ ご主人様のこの逞しいデカチンポ様で……♪」

由紀

「ご主人様専用のオナホールになった、私達アイドルおまんこを……」

華恋

「犯して、黴って、弄んでくださいね♪」

由紀

「犯して、黴って、弄んでよね……♪」

華恋 「はあ、はあ……ん〜……由紀ちゃん……華恋が先でいいの……？ 由紀ちゃんだってもうおまんこ限界なのに……」

由紀 「ここで一番初めに犯されたのは私だしね……っ
て思い返してみると、つい数時間前まではご主人様とエッチするのあんなに嫌がってたのに……あはは♪ 何か変なの……♪」

華恋 「そうだね……始めは由紀ちゃんが乱暴に犯されて、豚さんみたいに下品な声で鳴かされてるのを見てすっごく怖かったのに……」

華恋 「でも今はその逆……♪ これからはプロデューサーさんみたいな雑魚チンポじゃなくて、ご主人様の素敵なデカチンポ様で愛して貰えると思うと……あう〜♪ 期待と愛おしさで胸がいっぱいになっちゃうよ〜……♪」

由紀 「……うん♪ 私も楽しみ……♪ 所詮私達みたいな下品な体しか取り柄のないメス豚アイドル何て、ご主人様みたいな逞しくて強いオスのオナホアイドルとして愛してもらうのが一番幸せなんだって、体で教えてもらったから……♪」

華恋

「うん♪ ですから」主人様♪ お願いします♪
おちんぼ様欲しさにおまんこクパクパ痙攣させちゃってる、華恋のお下劣おまんこを……ご主人様の逞しいデカチンポ様でワカラせてください♪」

華恋

「さあ」主人様あ……♪ 華恋のオナホマンコを
く……くぱあ……♪」

華恋

「ん……あ……♪ ああ……♪ 「、」ご主人様あ
……♪ ん……あ……♪ き、来ます……♪
おちんぼ様おまんこに来ますう……♪」

華恋

「んお……♪ お……♪ お……♪ お……♪
お……♪ お……♪ お……♪ お……♪
おお……♪ い、イグ……♪ 入れただけでイグう……♪」

華恋

「ふう……♪ んふう……♪ お……♪
おお……♪ おまんこイグ……♪ おまんこイグう……♪」

華恋

「イグイグイグイグイグイグイグう……♪
く……♪ イ……ぎゆう……♪
く……♪」

華恋

「んっっ……っきゆう……♪
く……♪」

華恋

「んほおおおろろろろ……♪ ん、お……♪
お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪、お……♪
ろろろろ……♪」

華恋

「ん、お……♪、おろ……♪……♪、お……♪……♪……♪
♪ ん、お……♪……♪、お……♪、お……♪、お……♪
お……♪、おろろろろ……♪」

由紀

「か、華恋？ まだチンポ入れただけなのにそんな
ないっちゃって大丈夫なの……？」

華恋

「ん、お……♪、お……♪、おろ……♪、だ、大丈夫だ
よ……♪ 全然痛くないし……逆に気持ちよす
ぎて……♪ ん、お♪、お、おろろ♪ オホ声止
まらないの……って、んほ、お！？」

華恋

「ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
「お♪

華恋

「ん、おおお♪ マンコ捲れりゆ……♪、おち
んぽデカすぎておまんこ捲れりゆのおおおろろ
ろろ♪ ん、おろろ♪」

華恋

「お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪、お♪、お♪、おろろ♪、おろろ♪、おろろ♪、おろろ♪
「お♪

由紀

「あゝ……！ ちょっと華恋く？ 何かいい雰囲気になってるところ悪いけど、次は私がシてもらうんだから勝手に終わらせないでよね？」

由紀

「ん……ほら……ご主人様も……まだやるんでしょ？ ならさ……ん……」

由紀

「ご主人様のオナホに堕ちた由紀のおまんこ……いっぱい犯して……いっぱい愛してよね？」

由紀 「はあ、はあ……♪ ん……改めて見てもご主人様のチンポエグすぎ……」

由紀 「馬のチンポみたいに反り返って、血管も浮き出でて……はあ、はあ……こんなの入れられたら一瞬でオホっちゃうってば……♪」

華恋 「んへへ……♪ 由紀ちゃんってば、おまんこ待ち遠しそうにクパクパ痙攣してるよ？ 今もほら♪ トロろってマン汁零しちゃって♪」
主人様のおちんぽ様早く来てろって言ってるみたいで可愛い♪」

由紀 「ちよ、華恋ってば変な事言わないで……って、ひゃう……！？」

由紀 「あ……」「ご主人様？ そんな急に入れちゃ……ん、お……♪ お……♪ お、お……♪」

由紀 「だ、ダメえ……♪ イグう……♪ デカチン入られただけでイグう……♪ ん、お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ おまんこイツ……ぐうううううううう……♪」

由紀

「ん、お〜〜〜〜〜」お……
……♪ お……♪ お……♪ お……♪ ……
……♪ 「主人様のチンポしゅ〜いの、お〜〜……
……♪ ん、お……♪ お……♪ お……♪ ……
「お〜〜……♪」

由紀

「こんな簡単にお漏らしさせられりゅなんてえ……
……♪ ん、お〜……♪ 漏れりゅ……♪ マン
「からお潮漏れりゅ〜……♪ ん、お……♪
お……♪ お〜……♪ んほ、お〜……
……♪ 「〜?」

由紀

「ん、お!?! お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
♪ お♪
♪ お♪
♪」

由紀

「ちんぽパンパン来たあ……♪ ん、お〜〜♪
お♪
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪ お♪ お♪ お〜〜♪」

華恋

「わあ……♪ 由紀ちゃんのオホ声下品で可愛い
よ〜♪ まるで餌をオネダリする豚さんみたい
な、卑しくて情けなくて、とっても素敵なメス
の声♪」

華恋

「ほら、由紀ちゃん見て〜? 由紀ちゃんの可愛いオホ声を聴いてたら〜……♪」

華恋

「んほっ……♪ お……♪ お……♪ お……♪
……♪ イ、イグう……♪ 由紀ちゃんのオホ
声でイグ……♪ イグイグイグイグう……♪
」

華恋

「んっ……きゆううううう……♪」

華恋

「ん、お……♪ お……♪ お……♪
お、お……♪ 由紀ちゃんのオホ声で……
……んほ♪ お……♪ おまんこまたイッ
ちやっただ……♪」

華恋

「はあ、はあ……♪ でもでも……こんなオナ
ニーじゃ全然足りないよ……♪」

華恋

「んへへ……ですす……♪」

華恋

「ご主人様あ……♪ 由紀ちゃんを犯しながらで
構いませんから……♪ 華恋のお下劣おまん
こも弄ってください♪ 華恋の事、沢山オホら
せてください♪」

華恋

「ん……あ……♪ ああ……♪ 「ご主人様の指来
た……♪ つて、ん、お……♪ お……♪ お……♪
お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪
お……♪ お……♪ お……♪ お……♪ お……♪
」

由紀

「ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、ご主人様あ
……♪、お願いい……乳首も弄ってえ……♪
さつきから乳首熱いのお……♪、乳首勃起して
痛いのお……♪、ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お
……♪」

／ルビ：…抓られる＝っねざれる

由紀

「ね……♪、お願いだからあ……♪、っ、ん
ぎいいいいいい……♪、ん、お……♪
……♪、ぢ、ぢぐびい……♪、ん、お……♪
っ♪、抓られるのきもちいい……♪」

由紀

「ん、お♪、お♪、お……♪、もっど乳首潰し
てえ……♪、プチって思いっきりアイドルの乳
首潰してえ……♪、ん、お……♪、お♪
、お♪、お♪、お……♪」

華恋

「お♪、お♪、お♪、お……♪、「主人様あ
……♪、ん、お♪、お♪、お……♪、「主人
様の指最高すぎますう……♪」

華恋

「マン肉無理矢理開かれての尻スポ攻めえ……♪
ん、お……♪、おまん「緩むっ……♪
、おまん「閉じなくなりゅ……♪、おまん「
ガバガバになりゅ……♪」

華恋

「ん、お……♪、おまん「お……♪、おまん
「おまん「おまん「おまん「……♪
ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お……♪」

華恋

「ご主人様あ……♪ 受け取ってください……♪
オナホのマン汁マーキングう……♪ ご主人
様のお手々にマン汁ぶっかけてマン汁マーキン
グさせていただきますう……♪」

華恋

「ん、お……♪ マン汁う……♪ マン汁出ま
すう……♪ マン汁マン汁マン汁マン汁う……♪
……♪ アイドルのマン汁イッツグううう
ううう……♪」

華恋

「お♪、お……♪ ご主人様にマン汁マーキン
グう……♪ 下品な腰振りマーキングう……♪
お……♪、お♪、お♪、お♪、お……♪
」

由紀

「お♪、お♪、お♪、お……♪ 華恋だけズ
ルい……♪ご主人様あ……♪ 私もお……♪
ん、お♪、お♪、お♪、お……♪ マン汁マー
キングしゅりゅ……♪」

由紀

「はあ、はあ……♪ んおお♪ イ、イグう……
♪ おまんごされながらマン汁吹くう……♪
マン汁う……♪ マン汁マン汁マン汁マン汁う
……♪ ん、お……♪ イっきゅううう……♪
……♪」

由紀

「ん……♪ ありがとう……♪ ご主人様……愛し
てる……ん……ちゅ♪」

由紀 「え？ ご主人様ってば、私達がホテルに来た時からずっと撮影してたの！？ ちよつと聞いてないんだけど!？」

華恋 「それってやっぱり、華恋達が逃げられないようにする為ですか……?」

華恋 「んもう……♪ そんな事しなくても逃げたりなんてしないのに……♪」

華恋 「だって……あんな素敵なおちんぼ様を入れられたら……ね?」

由紀 「う……まあ……あんな気持ちよくさせられた後にプロデューサーの元に戻るとかありえないし……」

華恋 「ね〜♪ ご主人様ってば用心深いんですから〜♪」

華恋 「……って、ふえ？ この映像をプロデューサーさんに送るんですか?」

由紀 「もしかして寝取られ報告って奴？ うわあ〜……ご主人様の男らしいセックスを見せつけられたら、あの豆腐メンタルのプロデューサーさんやんじゃうんじゃない?」

華恋 「うん……ご主人様の方が地位も名誉も、オスとしての器の大きさも、何もかもが優ってるもんね」

華恋 「もしかしたらプロデューサーさん、あまりの劣等感で自殺しちゃうかも……」

華恋 「でもでも♪ ご主人様がシタっていうならいいですよ？ 華恋達の激しいおまんこエッチ♪ いっぱい見せつけちゃいましょ♪」

由紀 「ん……私達はもうご主人様のオナホアイドルなんだし……ご主人様がシたい事は応援したいし……」

由紀 「なによりも、プロデューサーさんにお別れを言ういい機会だしね」

華恋 「えへへ♪ それじゃあ早速う…… は……い♪ プロデューサーさ……ん♪ あなたの元恋人の華恋ですよ♪」

由紀 「ん……久しぶり。ここまで見てくれてたら分かると思うけど……プロデューサーさんとはお別れして、ご主人様のオナホとして生きていく事になったから」

華恋 「ですから♪ プロデューサーさんとは今日でお別れです♪ 今後は一人で寂しくシコシコしててくださいね♪」

由紀β 「プロデューサーさん♪」

華恋β 「プロデューサーさん♪」

由紀 「んもう、この前送ったビデオでも言ったよね？
私達はご主人様のオナホになったから、金輪
際連絡して来ないで……って」

華恋 「それなのにプロデューサーさんってば、何度も
華恋達に電話してきて……んもう……このまま
だと電話番号変えなきゃいけないじゃないです
か」

由紀 「でもさ……ぷぷ♪ てつきり私達に未練たら
たらなプロデューサーさんから気持ち悪いお説
教でもされるのかと思ってたけど……♪」

由紀 「留守番電話を確認してみたらビックリ♪ まさ
か『もっとご主人様との寝取られエッチの様子
を送ってくれ』だなんて……♪」

華恋 「えへへ♪ 華恋達が送ってあげた寝取られビデ
オレターにすっかりハマっちゃったんですね
♪」

華恋
〇

「ん〜……れ〜〜〜ろれろれろれろ〜
〜〜〜♪」

由紀

「ん〜……れれろれろれろ〜♪　じゆるる…
…んふふ♪　ほ〜ら♪　どう？　プロデュー
サーさんの大好きな耳舐めご奉仕だよ〜…
…？」

華恋

「じゆるじゆる……んちゆ♪　えへへ♪　生の女
の子にして貰うんじゃなくって、こ〜んな味気
ない機械で録音した耳舐め音声で二人シコシコ
するだなんて、プロデューサーさんってば情け
なさ過ぎますよ〜♪」

華恋

「これがもし生耳舐めだったらきつと今頃〜…
ん〜……くちゆくちゆくちゆくちゆ……ん〜…
…れ〜〜〜ろれ〜〜〜ろれ〜〜〜ろれ〜〜
ろ♪　じゆる♪　じゆるるる〜〜〜♪　ん〜…
…ちゆ♪」

華恋

「えへへ♪　このように〜……臭くて生温かい、
女の子のスケベな唾液でお耳がヌルヌルになっ
てるのに……ん〜……れ〜〜〜ろれろれろれ
ろ……♪」

由紀

「ん〜……わたしも〜……唾液をいっぱいベロに塗して〜……ん〜……くちゆくちゆくちゆくちゆくちゆ〜……んれ〜……ろれろれろ〜……れ〜……ろれろれろれろ〜……」

由紀

「んちゆ、じゅぶじゅぶ……じゆるる……んぷつ……れろれろれろ……♪　れろれろれろれろ……♪」

由紀

「んぷ……！　れろれろれろれろ……ん〜……ちゆ♪　ふふ♪　どう？　プロデューサーさんもそろそろ、おちんぽイキたくなってきたんじゃない？」

華恋

「えへへ♪　こ〜んなお遊びの耳舐めでもうイキそうなんですか〜？　えへへ♪　やっぱりプロデューサーさんは雑魚雑魚ですな〜♪　んれ〜ろれろれろ……♪」

由紀

「あは♪　こんな耳舐め音声聴いてるくらいなら風俗でもいってお耳舐めて貰えばいいのにね〜♪　ほんっと雑魚チンポの考える事は分かんないな〜♪　ん〜、ちゆ♪　れろれろれろれろ〜♪」

華恋

「んふふ♪　でもまだダメですよ？　雑魚チンポの癖に勝手にイッチャウだなんて許しません〜♪」

華恋

「華恋達がイって言いっていうまで絶対にイっちゃダメなんですから♪ ん〜……れ〜……ろれるろれ〜……ろれるろれ〜……♪」

由紀

「んちゅ♪ じゆるじゆる……ん〜……ふふ♪
そうそう♪ いっぱい我慢して？ 早漏チンポ
頑張ってシコシコして？」

由紀

「じゃないといつまでも女の子を満足させられない雑魚チンポになっちゃうよ？ 新しい恋人が出来ても私達みたいにすぐ強強チンポに寝取られちゃうよ？」

由紀

「だからほ〜ら♪ おちんぽ頑張れおちんぽ頑張れ〜♪ んれ〜……じゆるじゆる……
じゆるるる♪ ん〜……れ〜……ろれるろれるろ〜……♪」

華恋

「れるろれるろれる……んちゅ……ちゅ〜……ちゅ♪ はあ〜……えへへ♪ プロデューサーさん♪ お待たせしました♪ そろそろ気持ちいいおちんぽびゅっぴゅ♪ させてあげますね〜♪」

由紀

「んちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪ ほ〜ら♪ プロデューサーさん♪ いくよ〜♪」

華恋

「そ〜れ♪ プロデューサーさんの〜♪」

由紀

「そ〜れ♪ プロデューサーさんの〜♪」

華恋と

「ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪
ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪

由紀と

「ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪
ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪ ざあ」♪

華恋η

「ほらいケ♪ 雑魚チンポイっちやえ♪ イっ
ちやえ♪ イっちやえ♪ イっちやえ♪ イっ
ちやえ♪」

由紀η

「ほらいケ♪ 雑魚チンポイっちやえ♪ イっ
ちやえ♪ イっちやえ♪ イっちやえ♪ イっ
ちやえ♪」

華恋θ

「それぞれ♪ イケイケイケイケイケイケ
イケ♪ イケイケイケイケイケイケイケ
♪ 雑魚ちんぽイっちやえ♪♪♪♪♪♪
♪」

由紀θ

「それぞれ♪ イケイケイケイケイケイケ
イケ♪ イケイケイケイケイケイケイケ
♪ 雑魚チンポイっちやえ♪♪♪♪♪♪
♪」

由紀

「はるるい♪ プロデューサーさんお疲れる
♪」

華恋

「どうでした？ 華恋達の雑魚チンポ煽り、気に入っていただけましたか？」

由紀 「ご主人様相手じゃこんな煽りできないし、ちよつと新鮮で楽しかったね〜♪」

由紀 「もしプロデューサーさんがもっと雑魚チンポ煽って欲しい、もっと罵って欲しいって希望があれば答えてあげるから言ってみてね？」

華恋 「えへへ♪ それではプロデューサーさん♪ この後華恋達はお口直しにご主人様の強強チンポ様にいっぱい犯してもらおうので♪」

由紀 「私達のご主人様のデカチンでメス豚になつてる姿でも想像しながらシコシコし続けてよね♪」

華恋 「そういうことで♪」

華恋 「プロデューサーさん♪ バイバイです♪」

由紀 「プロデューサーさん♪ バイバイ♪」
